

臨床実習指導者の臨床実習指導に対する意識調査

高橋方子, 竹本由香里, 丸山良子

宮城大学看護学部

キーワード

臨床実習指導者, 臨床実習指導, よい影響, 好ましくない影響

clinical nursing instructors, clinical nursing practice, positive effect, negative effect

要 旨

臨床実習指導者が、臨床実習指導に関ることについて自分自身及び病棟にとってどのような影響があると認識しているのかを明らかにするために、質問紙による集合調査を行った。調査対象は臨床実習指導者講習会を受講し、かつ臨床実習指導経験のある看護婦35名であった。調査の結果以下のことが明らかになった。よい影響として、臨床実習指導に関することで看護者としての自分自身、及び病棟全体を再評価する機会を得ていることが示唆された。好ましくない影響は、業務量の増加など実務的な内容に関することが多く、調整することで解決できる可能性があると考えられた。

The Investigation of The Clinical Nursing Instructor's Perceptions about Participating in Clinical Nursing Practice

Masako Takahashi, Yukari Takemoto, Ryoko Maruyama

Miyagi University School of Nursing

Abstract

The purpose of this study was to clarify the perceptions of clinical nursing instructors, who provide education for students during clinical nursing practice. A written questionnaire was administered to 35 clinical nursing instructors who enrolled in an in-service training class on clinical nursing practice. The findings of this study were as follows. Participation in clinical nursing practice provided a positive effect through the need for the clinical nursing instructors to reconsider themselves and the wards where they work. Negative effects are related to their daily work, for example, increased work loads, but the problems seem to be solvable.

I. はじめに

学生は臨床での体験を通して多くのことを学び、臨床実習は看護基礎教育を学ぶにあたり欠かせないものであることは周知の事実である。一方、指導者側にとっても臨床実習から得る学びは大きいと述べているものは多いが、具体的に臨床実習指導を経験したものが臨床実習をどのように捉えているかについての具体的な研究報告はほとんど行われていない。本研究はまず指導する側の看護職の臨床実習に対する意識について検討し、臨床と教育のよい連携のもとに、共に成長できる臨床看護学実習のあり方について考える基礎資料とすることを目的とした。

II. 研究方法

1) 調査対象及び方法

M県の臨床実習指導者講習会を受講した看護職50名に対し、講習会の最終日にあたる2000年10月12日に質問紙による集合調査を行った。47名から回収し（回収率94.0%）、その内臨床実習指導の経験がある35名のデータについて分析を行った。

2) 質問紙の内容

臨床実習に対する感情を調査するために、実習指導が好きかについて5段階評定で回答を求めた。また、実際に指導した項目を具体的に記述してもらった。臨床実習指導に関することで個人として及び病棟として、よい影響、負担になる点があるかどうかについて質問をし、あると答えたものにはその内容を自由記述で回答してもらった。

3) 分析方法

実習指導内容、臨床実習指導に関する個人として

の意識および病棟全体に及ぼす影響に関する自由回答については、研究者2名で内容分析を行った。意味内容の区切りごとをデータとし、その類似性により分類を行った。また、分析の信頼性を確認するために一貫性の検討を約1ヶ月後の再分析により行った。それ以外の項目については単純集計を行った。

III. 結果および考察

1) 対象者の属性

対象者の属性は表1に示す通りである。対象者はすべて女性であり、平均年齢37.0±6.0才、平均臨床経験年数15.3±6.4年、平均臨床実習指導年数6.0±5.0年であった。

2) 実習指導に対する感情について

臨床実習指導に関ることが好きかについては、非常に好きである1名(2.9%)、どちらかという好きである33名(94.3%)、どちらとも言えないが1名(2.9%)であった。今回分析した対象者はほとんどが臨床実習指導を行うことに好意的な感情を持っていた。

3) 臨床実習指導内容について

自由記述で回答した臨床実習指導内容を分析し、10項目に分類した。その結果は図1に示す通りである。回答者数が多かったのは、「ケアをいっしょに行う」「学生の記録を評価する」「看護計画を指導する」であった。

4) 臨床実習指導に対する意識について

①臨床実習指導者として実習に関することでよい影響について

実習指導にかかわることが自分自身により影

表1 対象者の属性

(n=35) 人数 (%)

性別	女性	35 (100)	臨床経験年数	6~10	10 (28.6)
年齢	26~30	7 (20.0)		11~20	14 (40.0)
	31~40	12 (34.3)		21~30	10 (28.6)
	41~50	15 (42.9)		無回答	1 (2.9)
	無回答	1 (2.9)	実習指導経験年数	1~5	21 (60.0)
専門学歴	専門学校 (2年課程)	11 (31.4)		6~10	7 (20.0)
	専門学校 (3年課程)	18 (51.4)		11~15以上	5 (14.3)
	短期大学 (3年課程)	5 (14.3)		無回答	2 (5.7)
	無回答	1 (2.9)			

響をもたらすと意識していたものは35名で100%であった。よい影響があると答えた35名中33名の自由回答を内容分析し9項目に分類した。その結果を表2に示す。

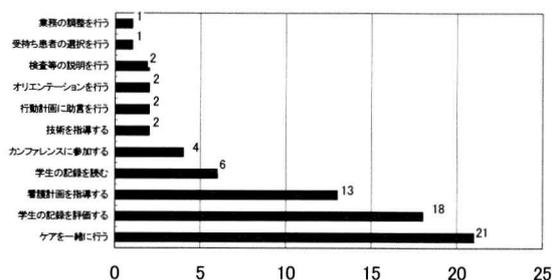


図1 実習指導内容

表2 臨床実習指導に関ることでのよい影響 (回答者数33名)

項目	述べ人数
自分自身の看護を振り返る機会になる	14
自己学習の契機となる	12
学生の新鮮な発想に触れることができる	7
最近の教育内容を知ることができる	4
学生と看護場面を共有することで学ぶものがある	4
自分自身に不足していることに気づくことができる	3
忘れていたことを思い出す契機となる	2
現代の若者について知る機会となる	2
自分自身の成長につながる	2

自分自身により影響をもたらしたと考える点はすべて個人の内面的なものであった。具体的には「自分自身の看護を振り返る機会になる」というように自己啓発につながっていた。また「自己学習の契機になる」等内発的動機づけになっていた。それ以外の項目も自分自身を再評価することから表出するものであると思われた。E. ウィーデンバックは、「看護婦の感じたり考えたりすることはほとんどが目に見えてこないにもかかわらず、看護実践の中では最も重要な意味を持つ部分であるとし、それらは看護婦の行為を方向づけ、かなりの程度まで患者に対する看護婦の目に見える行為

の効果まで決定する。」と述べている¹⁾。このように看護婦自身のありようが看護そのものに反映されることを考えると、看護を行うにあたって自分自身を再評価する機会は是非必要であると考えられるが、学生と関することで指導者はそのような機会を得る事ができると思われた。

②臨床実習指導に関することで負担になる点について

実習指導に関することが負担になる面もあると意識していたものは13名(37.2%)であった。13名の自由回答について内容分析を行い、表3に示すように6項目に分類した。

表3 臨床実習指導に関ることでの負担 (回答者数13名)

項目	述べ人数
実習記録を読む事が時間外になる	5
業務が滞る	3
時間外勤務が多くなる	3
自己否定感を持つ	1
疲労感が大きい	1
学生への気遣いが要る	1

よい影響は指導者個人の内面的なものであったが、負担に思う点は実務的な面が多くあげられていた。これらの内容は各施設の臨床実習指導体制や学校を含めた指導形態に関する内容であり、例えば記録に関しては学校側で責任を持つ、あるいは時間外手当を出すなど調整することで解決できる可能性が高いのではないかと考えられた。臨床実習を円滑に行うにあたり、スタッフの業務量が過重でないことや時間のゆとりの必要性が報告されている²⁾³⁾⁴⁾。このような報告もふまえ、臨床実習指導に関ることでの負担を減らしていくよう調整を行う必要があると思われる。

4) 臨床実習指導が病棟に及ぼす影響について

①病棟にとってよい影響

臨床実習が行われることは、病棟により影響を及ぼすと回答したものは32名(91.4%)であった。そのうち29名の自由回答について内容分析した結果、11項目に分類した。その結果を表4に示す。

表4 臨床実習が病棟に及ぼすよい影響

(回答者数32名)

項 目	述べ人数
活気がでる	6
スタッフ自身の学びとなる	4
ケアの向上につながる	4
緊張感が生まれる	3
スタッフの学習意欲を引き出す	3
よいモデルとしての意識が生まれる	3
患者が学生をくるとを楽しみにしている	3
業務改善につながることもある	3
新鮮な気持ちになる	2
よい刺激になる	2

病棟全体にとっては「活気がでる」「緊張感が生まれる」「よいモデルとしての意識が生まれる」「新鮮な気持ちになる」など労働意欲を高める効果があると思われる。また個人としてでなく病棟全体で考えることができれば、「ケアの向上につながる」「業務の改善につながる」というように病棟全体を再評価し、その結果生産的な効果を生み出す事につながる事が示唆された。

②病棟にとって好ましくない影響

臨床実習指導が行われることで病棟にとって好ましくない影響があると答えたものは、9名(25.7%)であった。9名の自由回答について内容分析を行い、3項目に分類した。その結果を表5に示す。

表5 病棟にとって好ましくない影響

(回答者数9名)

項 目	述べ人数
業務が滞る	4
業務量が増加し負担である	4
患者に負担になる	1

病棟にとって好ましくない影響は個人にとって負担になる点と同様に、業務に関するものがほとんどであった。

IV. 結 論

- ①臨床実習指導の経験があるものは、全員臨床実習に関することは自分自身にとってよい影響があったとしている。
- ②実習指導に関することは、個人としてあるいは病棟全体を自分自身で再評価する契機となると考えられた。
- ③臨床実習指導に関することは、臨床実習指導者にとって自己啓発や内発的動機づけの機会になることが示唆された。
- ④臨床実習に関することでの好ましくない影響は、個人にとっても病棟全体にとっても実習指導形態に関するものであり、調整することで解決することができる可能性があると考えられた。

V. おわりに

今回の調査では、臨床実習指導に関することは自分自身あるいは病棟を再評価する機会になると考えられた。しかし評価するという事は自分自身を吟味し認識するという効果があっても、その段階で止まってしまうのでは必ずしも有効であるとは言いがたい。評価をした事がどのように生かされたかについてまで含めて調査を行う必要があり、今後の課題となると思われる。

引用文献・参考文献

- 1) E. ウィーデンバック著、外口玉子、池田明子訳；臨床看護の本質、第2版、21-26、現代社、1984
- 2) 白石令子、小林めぐみ、花田妙子；臨床実習における看護学生の存在に関する研究、日本看護研究学会雑誌、20(3)、345、1997
- 3) 鈴木真理子；臨床指導の盲点とあり方、看護教育、37(8)、658-662、1996
- 4) Lynda Atack, Margret Comacu, Renee Kenny, Nancy Labelle, Debra Miller; Student and Staff Relationships in a Clinical Practice Model: Impact on Learning, Journal of Nursing Education, 39(2), 387-392, 2000
- 5) 安彦忠彦；自己評価、初版、厚徳社、1996
- 6) 梶田叡一；教育における評価の理論 学力観評価観の転換、初版、金子書房、1994
- 7) 下山剛；学習意欲の見方・導き方、初版、教育出版、1985